C7　家庭科教育における「保育」領域の研究(3)—中学校の場合—

上越教育大　○大瀧ミドリ　都立久留米高　桑名有米子
宇都宮大教育　金崎芙美子　東京家政大家政　川合貞子

目的：技術・家庭科の教師から「保育は難しい」「保育で教えるべきことが明確でない」あるいは、生徒の現状について「保育を離れ、作ることに熱中してしまう」「親批判に留って、自己理解にゆかない」等の指摘がある。さらに母親でありかつ当教科の担当教師からは「保育を教えると、自己葛藤に陥り、教えることが苦痛になる。でなければ教えたくない」等の指摘さえある。その一方で、「保育は、生徒の自己洞察力を育てる」「人間への理解が育つ」等、積極的に保育の学習効果を指摘するものもある。このような多彩な指摘がなされる原因は、保育教育のどこに存在するのであろうか。そこで、本研究では、教育の目標，内容，方法，教材等について検討し、問題の所在を明らかにしたいと考えている。

方法：今回は、中学校学習指導要領及び指導書，現在検定教科書として使用されている技術・家庭科（下）及び教師用指導書について分析をけころ。

結果：つぎの6点に要約される。

①親と子の関係がまさに感覚的には拮抗期にあるともいうべき中学生に対して親子情緒的教育内容がもりこまれている。②教科書の中で描かれている子どもの姿は、健常な感覚を示すものであり、人間存在について多様性を欠き、画一的傾向が顕著である。③子どもをとりまく大人の姿は没個性的かつ不鮮明に描かれている。④家庭と社会の関係性が有機的にとらえられていない。⑤親と子の関係は、ともに育つ関係としてはとらえられず、完成されたものと未熟なものと固定的にとらえられている。⑥全体の記述は、あるべき姿について述べられており、どろどろした生活している人間の姿が見えにくい。